
人生なんてそんなもの

檸檬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生なんてそんなもの

【Nコード】

N4774T

【作者名】

檸檬

【あらすじ】

JRのディーゼル君、あいつを俺の血液で芸術作品に仕上げた所で俺の人生は決まった。

あのディーゼル君は歴史的建造物？になっただかば甚だ不明だが少なくとも俺はそれを見ることは無いだろう。だって、過去に戻っちゃったから。

人生やり直し出来るなんて始めて知ったよ

世界は広い、いろいろな人が居ればいろいろな考えを持つ人が居る。だからきつと俺みたい人間が一人ぐらい居てもおかしくはない。

60億人いるのだ、一人所か、もしかしたら二人や三人くらい居るかもしれない。きつと、たぶん、おそらく、メイビー。

「あら、またこの子しかめっ面してるわ。本当に泣かない子ねえ」
泣かないわけじゃない、人生の深みを体感しているのだよ母よ。
久しぶり母さん、昨日ぶり母さん、なんつーか若いですね母さん。

人生色々とは言いが、20代の母親に会えるとは思いませんでした。まじびつくりです、というか家の中も新しいし。確か建てたばかりだろうから新築だろう、あ、ちよつと持ち上げるの勘弁して、もうちよつと頭をこっしつかり抑えてくれ母さん、危ない、危ないよ母さん。

2

はあ、もうため息の一つでも付きたくなる。夢か？ これは夢か？ いやきつと夢だ。現実逃避のつもりは無いんだが、完全に現実逃避ですねわかります。現実逃避したい気分なんだ許してくれ。

もうなんかあーとかうーしかしゃべれないし。なんなんだよもう、あーうー星人かよこの野郎。つーか母さん結構美人だったんだ知らないなかったよ。と、言うかもうどうすんだよこの状況。

ああ、なに？ 何でこんな状況になっているかって？ 死んだんだよ。

え？ 分からない？ なんか企業の戦士として頑張っている所で

線路に落つこちてスプラッタだよ、多分だけど。

最後の記憶は迫り来るディーゼル君のイカした青色の鉄仮面さ。
あの青い顔に俺の血液を塗りたくって絶妙なカラーリングになったかは不明だが、おそらく死後有名になるような芸術作品には成らなかっただろう。残念この上無い。

そんなわけで電車をキャンパスとして作り上げた芸術作品の後に、気が付いたら赤ん坊って訳さ、すごいね人生、捨てたもんじゃねえよ。

ちなみに憑依じゃねえ、逆行さ、だつて母さんだもん、俺の母さん、間違いないえ。名前も一緒だし、月光がっこう輝あきひです。月光でがっこうって読むんだぜ、こんな苗字持つてる奴俺くらいだよ、どこの小説家のペンネームだよって話だよ。

そついや小学校の頃この名前で虐められたんだよなあ、嫌な思い出だ、今となつては良い思い出か？ つーかまたやり直しなの？ よっしゃ今度はあいつらぶちのめしてやるこの野郎。まず上履きに生クリームを入れてやろう、甘い香りで怒りを抑えつつ、ぬちゃぬちゃの感覚で怒りを増幅、どうすればいいの俺！ 的な感覚を味わうが良いさ。

だがそんな事よりまずは成長しないとならん、いつまでも0歳児やってるわけにはいかんだ。理由はもうわかんないし別にいいや、やり直せる機会貰ったんだから今度は企業の戦士はご遠慮したい所、企業戦士ブルーとかレッドとかもう流行らないよ。今の時代は企業戦隊だよ、企業戦隊キギョレンジャー、無いな、まず無いな。

あーもー、頭蓋骨の軟骨がすっかり出来上がってないからその持

ち方じゃだめだつて母さん。頭がふにゆつてする度に、見えちゃいけないものとか見えそうなんだよ、ほんと勘弁してくれよ。

「もうちよつと手がかかっても良いのに。本当に大人しい子ねえ、貴方に似たのかしら？」

「うーん、お前に似たんじやないのか？ 大人しいだろお前」

あーもう息子の前でいちゃつかなくて良いから、意識あるから俺。両親のラブとかあんま見たくないから、そういえば俺が2歳の時に妹が出来たんだっけか……。ああ、なんか想像したくねえ、やめてくれ、もうやめてくれ、想像する俺の脳がもう限界です。赤ん坊のキヤパ舐めんなよくそう。

今度は妹に優しくしてやりたいなあ、いや別に兄弟仲悪かったわけじゃないけどやっぱりほら、子供ながらの我侬とかいつぱいあつたし、俺これでも26歳だから！ 大人な対応的な？ やつちゃうよ俺、大人の対応やつちゃうよ。

それと頭が柔らかいうちに色々勉強しちゃうよ、まじ天才児誕生だよ。あ、でもあんまり派手にやると世間の注目を浴びるな、それは勘弁だなー、もつとぐーたら生活を謳歌したい。

体も鍛えるべきだろうか？ やっぱダンディーな男って憧れるよね、煙草は体に合わなかつたけど酒は飲めるようになりたいな。子供の頃から耐性付けておけば弱さを克服できるだろうか。俺、弱かつたからなあ、ビール3杯で真っ赤だったし、スコッチとか空けてみてえ、ワインとかラツパ飲みしてみてえ。

「あきちゃん、お腹は空かないかなー？」

おう、母乳タイムつか、それはちよつと悩み所なんだよ。母さんの胸に欲情する事は無いけど複雑な気分なんだよ、しかも地味にできえし、やるじゃねえか親父……！ いい女房ゲットしやがって、

しかしいつもしかめっ面で新聞読んでいた親父が満面の笑みとかちよつと怖い、あ、でも親父の方が抱くのうめえ、やるな親父。

「あら、貴方が抱くと動かないわね、私の抱き方が悪いのかしら？」
「そうだよ、母さん頭の支えが悪いんだよ。まじ変な物見えるんだから、脳の一部が軟骨からにゆるっと出てきたらどうすんだよ本当に。労災もんだぜ。」

「同僚のお子さんを抱いたことも有るからな、その時ちよつと教わったんだよ」

「あら、橘さんのところの娘さん？　そういえば先月生まれたって言うってたわね」

「お前が入院してた時だったからな。また挨拶に行こうか」

「そうね、息子と同一年だし、良い友達になつてくれると良いわね」
橘？　あー橘　由美ね。懐かしいなあ、確か22歳で結婚したんだよな、年上の男と。子供の頃は色々一緒に遊んだ記憶があるけど中学校から疎遠になって、気が付いたら結婚しましたって連絡が来たんだよなあ。

「そーいやあいつにも色々悪い事したよなあ、子供ながらの黒歴史じゃないけど、本当に何でもちよつと大人の対応が出来なかったのか不思議に思う。」

今度はもうちよつと優しく対応してあげたほうが良いよなあ、いや、別に罪悪感とか無いよ？　絵の具セットに蟬の抜け殻を大量に入れて泣かした事に罪悪感とか感じてないよ、本当だよ。

「ごめんやっぱ悪い事したな、とりあえず会ったら謝っておくか。」
土下座は無理だから寝返りで勘弁してもらおう。首が据わるまで待

つてくれるとありがたい。

お、親父に母さんお出かけかい？ おお、橘の家に行くのか、有言実行早くねえ？

そーいや家も近かったんだったか、それならもつと早く会いに行けばよかったんじゃないかねえのか？ 何この微妙な距離感、つーか急に行って良いの？ 向こうさんの都合は良いの？ ヘイ、ユー！ 親しい中にも礼儀有りじゃねえのか？ いいのかおい！

「あら、どうかしたのあきちちゃん、お腹空いたのかなー？」

ちげえよ！ あんたらの世間一般的な常識を疑ってるんだよ、母さんあんたそんな人じゃなかっただろ！ なんだよ、俺が生まれて浮かれてるのかよ嬉しいじゃねえか！

「さつき上げたんじゃないかったのか？」

「だと思っただけれど、んーと。子育ての本では……」

うわ、子育ての本出てきたよ。赤ちゃんの育て方とか書いてるよ、つーか何冊出てくるんだよ、そんなに必要無いだろ。

なんか本を読み始めちゃったし、橘家はどうなった。そういや母さん大掃除してて出てきた漫画とかアルバムとか読んじゃう人だったな。

「あら、大人しくなっただわね」

「橘の奴に聞いて見よう。あつちは1ヶ月先輩だからな」

便利屋かよ橘家、まあいいけど。とりあえず抱え方学んでくれれば俺は文句ねえよ。

よう、久しぶり幼馴染

「月光さんの所のお子さんも」

「そんな由美ちゃんだって」

「そういえばあれは？」

「まだかしら」

親同士が歓談している。そして俺は母さんの腕の中じゃなくて親父の腕の中に居る。悪いな母さん、親父の方が良いんだ割と切実に俺の脳みそ保護的な問題で。

目の前にはベビーベットに寝かされてる由美が見える。由美なんか猿だな、いや悪い嘘、なんかこう、人だね。

ぼーっと見やがって、お前もその内人生の苦悩を知る事になるんだぞ、小学校の算数とかも俺が教えちゃう立場だからな、今の内に上下関係を示しておく必要があるな。

いや、だがしかしまずは謝罪だ、蝉の件を謝罪しなければならんそれは男として最低限の礼儀、いや筋つてえもんだ。今はちよつと土下座はできねえ、寝返りもできねえ、つーわけで瞬きするから感じろ、俺の思いを感じる、すまねえ由美、俺が悪かった瞬き百連発。

「お、輝どうした？ 目にごみが入ったか？」

ちげえよ！ 謝罪の意を示してたんだよ、俺のほどばしる思いを
目に集めてたんだよ。親父なら分かるだろ！ 分かってくれるだろ！

「おい、早苗、輝の目にゴミが入ったみたいなんだ。ああ、そう
だ橋なんか無いか？」

だからちげえって！ 謝罪だつて！ 蝉の謝罪なんだよ分かって
くれよ。ちなみに早苗は母さんの名前だ。親父は毅つよしだ。月光 毅つよし
てどこの戦隊物のヒーローだよ、レッドか？ レッドなのか？

「どれどれ、あれ？ 特に涙も出てないみたいだし、大丈夫そうよ
？」

「あれ、本当だ。おかしいな」

「まぶしかったとかじゃないの？」

「うーん、かもしれんな」

ちげえよ（以下略）

ふう、まあしかたが無い。俺は今だあーうー星人Lv2くらいだ。
日本語をしゃべれるまでもう少し時間がかかる、この場は我慢する
しかないか。

「それにしても輝ちゃんは大人しいわね。うちの由美は何かあるた
び直ぐ泣くのよ」

「やっぱりそうよね？ 全然泣かないから本とか調べて、先生にも
連絡したんだけど」

「でもそういう子もいるらしいからね。ただダウン症とか病気の可

能性もあるから気をつけて」

「うん、注意しておくわ」

あー、じゃあちよつと泣いた方が良いのか？ 泣かなけりゃいかんのか？ 泣くことを強要されるってどうよ、それで母さんの悩みが減るなら良いけども。しかし、いざ泣けといわれても困るな、悲しいこと、悲しいこと……、うつむ。

キャバクラで会計が10万超えた時？ いや、大学の時振られたあの思いでも中々に捨てがたいな、財布落としたのも結構来たんだよなあ。

「輝ちゃんしかめっ面になってるわよ？」

「そうなのよー、良くこんな顔してるの、泣くのを我慢してるのかしらっ？」

あなたの悩みを解決しようと考えているんだよ！

とりあえずその後当たり障りの無い話をした後家に戻った。

1歳になりました

どうも1歳になりました、御免なさい嘘です、もうちょっとで1歳です。

サバを読みたい年頃なんです、背伸びをしたい年頃なんです。まだ立てないけどね。

何だよこの膝、ふにやっとしやがって、俺の膝の癖に生意気だ。頑張れよ、まじ頑張れよ、俺の足頑張れよ！

生まれたての子羊だって腹の中から出て直ぐに立つじゃねえかよ、あ、ちなみにハイハイは出来るよ。寝返りとか余裕。

でもまだしゃべれないっす、なんか舌が上手く動かない。勘弁して欲しい、もう一番最初にしゃべるのは勘弁して欲しいにしようかと真剣に考え中だ。

ちなみに今、橘の家だ。ママさん同盟って奴だ、別に構わんがこの女が叩いてくるのはどうにかして欲しい。

「あー？ あっあっ、きゃっきゃ」

おうおう、元気だね由美さん。俺はもう一杯一杯だよ、Mじゃないから勘弁してくれ。そんな所に目覚める俺じゃないんだ、すまねえが他の男を捜してくれ。ちょっと痛い、痛いって、ガラガラは叩くものじゃないから。

「あー？」

なんだよおい、ガン垂れてるんじゃねえよ。お前、俺が女性に優しく紳士的な対応をしているからって調子に乗るんじゃねえぞ、そのガラガラをこの場で分解してやっても良いんだぜ？ ああん？ きゅっきゅと回せば取っ手が外れることは既に確認済みだぜ？

本当だぜ？ 脅しじゃねえんだぜ？

ゴン

いでっ……、ふ、ふふふ、てめえは俺を怒らせた、やったるわオラー！

「ちょっと！ 由美ちゃん駄目よ。御免なさい早苗さん……」

「あらあら、大丈夫よ、ほらほらおいであきちゃん、痛くないわよ」
ちっ、命拾いしたな、俺のこのぶにぶにコラーゲンたっぷりパンチを食らわせられなかったのは残念だが仕方がねえ。親に感謝するんだな。

まったく、暴力はいけねえよ暴力は。無抵抗の俺にバンバンガラガラで叩きやがって。ガラガラの音がガダガダになってたじゃねえか、俺が吸音材がよ、くそつたれ。多少軟骨が頑張って堅くなってきたるけどまだまだなんだぜ？ 馬鹿になったらどうすんだよまじで、むにゅって脳が隙間から出たらどうすんだよまじで。

とりあえず結果オーライ、脳の流出は無かったみたいだ。俺の軟骨に感謝しろよ由美、土下座して感謝しろ。

やっぱり格闘技を習う必要があるな、このままじゃガラガラ撲殺殺人事件が起きてしまう、電車で轢かれた後はガラガラで撲殺されるとか浮ばれない、自縛霊になる自信が有るね、むしろなってる。毎晩ガラガラーガラガラーって唸ってる、夜布団の上でガラガラ

を鳴らしてやる、睡眠妨害で道連れだ。

「よしよし、こぶは出来てないみたいね」

ちよつと、母さん、あんまり強く押さないで。まだ出来上がっていないから、俺の頭出来上がってないから。大体出来上がってるけどまだだから。

「ごめんなさいね早苗さん、輝ちゃんもごめんね」

いいってことよ、過去には拘らない男だからな俺は、心配すんなガラガラをバラすだけで許してやらあ。はっはっはっは。

「あら、笑ってるわこの子」

「お母さんの腕の中が良いんじゃないかしら？」

「そうかしら……、なんか違う気がするのだけれど……」
「気のせいだぞ母よ。」

「ハッピーバースデー、あきちゃん」

満面の笑顔でケーキに1本の蝋燭を立てて祝ってくれる両親二人、

でも俺ケーキ食えないけどね。

ケーキを買っている時二人で食うの？ その大きさ二人で食うの？ って思ったら橘家も呼んでいた。コーゲンパンチが火を吹くときか、と思ったら由美は寝ていた。さすがに寝てる相手に暴力はいけねえ、女子供相手にムキになっちゃいけねえ、気を付けないといけない俺も。

暴力をむやみやたらに振るっちゃいけねえ、それはやっちゃいけねえ事だ。でもたまにはきつと良いだろう。

ぐーすかと暢気に寝ている由美を横目にため息を付く、最近母さんに買ってもらった本を読む俺、でもつままない。しょうがないので壁伝いに立ち歩きをして親父の部屋へ向かう。

ってまじか！ 俺立ち歩きしてる、俺の足頑張ってる、超頑張ってる、日々の努力が身を結んだ。ハイハイ部屋20週とか日々の訓練が身を結んだ、やったぜ俺、やったぜ俺の足。

「ちよつと！ あきちゃん！ あきちゃんが！ 早苗さんあきちゃんか！」

うるせえな、俺は今俺の足に感動しているんだ。まじ良く頑張った、ハイハイとかもうおさらばだ。まじほんとやった、感動で前が見える。

もうこの思いを叫びたい、声に出したい、感動を皆に伝えたい。

「あきちゃあああん、あなた！ あきちゃんが立ってるわ！ 立ってるわよ！」

「なに！ 本当か！」

騒ぎを聞きつけた家族と橘家が集まってくる、そのオーディエンズに向かって姿勢を正す。

皆有難う、俺の頑張りをたたえてくれて有難う、この思いを伝えたい、心の思いを伝えたい。

「イイヤアア！」

握り拳を作ること忘れぬ、やり遂げた、俺はやり遂げたよ。

なんとも言えない空気になったのは気のせいだろう。

「あの、早苗さん……？」

「最初の言葉がこれなんて……」

「握り拳、握り拳かわいいぞ、かわいいぞ輝！」

「あなた、それ違う気がするわよ……」

なんだ騒がしいな、もう一度ご所望なのか？ しょうがないな期待に答えるのが息子、見てる母さん。

ぐつと握り拳を前に作り前傾姿勢をとる。ちなみに片方の手は壁に付いたままだ。

今度は指で天井をさし、ポーズを決める。

「ヒーハー」

ふふふ、このくらいならしゃべれるんだぜ。驚いたか！

「かわいい、かわいいわあきちゃん！」

「いや、おまえ、さっきのほうが可愛いだろう？」

親馬鹿二人がカメラを持って俺を撮影している。この体勢結構辛い、腕の筋肉がまだ微妙なんだ、そろそろ限界。

「あの、両方どうかと思うのだけれど……」
ぼそりと橘の奥さんがしゃべっていたのは聞かなかったことにし
よう。

人に向かって投げてはいけません

へいへいへい、二足歩行に進化した輝だ、宜しくな。ああん？
何だこの野郎ぺちぺち動きやがって可愛いじゃねえか。前の時は居なかつたが両親に思うところがあつたんだらうか、まあ良いさ。

そんなこんなで目の前には、産まれたばかりの柴犬の子供が居た。

名前はドツペルゲンガーシュトルツハイムアーノルドゲシュペリオンだ。ごめん嘘、ポッキーです。名付け親は父親だ、センスが無いとか言っちゃいけない、俺が一番思っている。

その今日の出来事で一番の座を連続で取り続けているポッキーは、ごろごろ回りながら絨毯の上で毛繕いをしている、可愛すぎる、こいつ可愛すぎる。

「だっ」

べしつとポッキーの頭が叩かれる。ポッキイイイイ！ 何してくれんのあんた！ ちよつとあんた家のポッキーに何してくれんの！

キヤンと泣くのが面白いのかペシペシと叩くその悪魔は、今日もお邪魔されてます橘 由美である。

この極悪非道からポッキーを守らなければならない、そう今日は俺はポッキーの騎士、ナイト輝である。

ぎゅつとポッキーを抱えて由美から離れる、二足歩行舐めんなよ、つーか重い。子犬と思って油断した、重てえ。筋肉がなさ過ぎるよ俺の腕、1歳と少しだから仕方が無いと言うのか、絶望した、俺の

腕に絶望した。

ずりずりとポツキーの後ろ足を引きずりながら悪魔ゆみから離脱する。しかし、甘かった、俺は甘かった、蜂蜜に砂糖を振り掛けてシロツブと混ぜるくらい甘かった。

飛来するは積み木、子供にも使えるように柔らかい素材で作つてある奴だ。そいつが弾丸の如く俺に強襲した。

くっ、どこのスナイパーだ、この俺の後頭部を狙うとは。

慌てて後ろを見ると半泣きで積み木を投げってくる由美が目映る。ちよつとまで、俺が悪いのか、俺が悪役なのか。

「こら、駄目でしょあきちちゃん、由美ちゃんと仲良くしないと」

騒ぎを聞きつけたのかキッチンで何かを作っていた母さんが駆けつけてきて俺を叱る。

ええええええ、オウ、マイ、ゴツツ……。神は俺を見放した、我が同胞を守ることとはここまで苦難だというのが、すまないポツキー俺が力不足で……。

腕の中に納まるつぶらな瞳が俺に迫る。力不足なおれを恨んでくれ、すまない、すまないポツキー！

「ほら、ポツキーを離して。ポツキーが辛そうにしてるでしょ」

まじかよ、むしろ俺が虐めてたのかよ、酷い、これは酷い真実だ。もうためだ、俺はもう立ち直れない、親父の書室に行つて本でも読んでこよう。俺は引きこもるんだ、引き止めないでくれ、俺は自分の世界に閉じこもるんだから。

ちきしょー、こうなったら2歳になるまでに英語マスターしてやるよ。幼児の頭の吸収度舐めんなよ、スポンジじゃねえよマイク口

ファイバー吸水タオル並みだよ。

「輝、何処行くの？ 由美ちゃんの相手してあげて」

へい、母さん。1歳半の子供にそんな事頼むなよ、そりや表面上落ち着いているように見えるかもしれないが、一応1歳っぽい感じで生活してるんだぜ？ 想像上だけど。

ま、しかたがないな。泣かしたままじゃあれだし。紳士じゃねえよな。しかたがねえ、っておい！ また積み木投げってくるのかよ、1歳のくせに結構飛ばじゃねえか。いてえ、いてえっての、まだ体ぶよぶよなんだよ、ガツキンって防御できないんだよ。メコツて凹むんだよ、勘弁してくれよ本当に。

とりあえず背中を向けて暫く我慢したら収まった。生憎と積み木はやわらかい素材だったので名誉の勲章は無いがまさにDVだ、家庭内暴力だこれは。

あの野郎がまともな思考を持つ頃になったら文句を言ってやる、絶対忘れんぞ。

「はい、ミルクの時間よ」

おおう、飯の時間か。まだ歯が無いからな、離乳食はまだか。ミルクも飽きたんだよな、ゲップ出るし。母乳を飲む時複雑な顔に氣付いた母さんがミルクに変えたんだ。別にまずかったわけじゃねえよ？ でもわかるだろ？ 母さんがちよつと悲しそうな顔をしてたけどそこは勘弁してくれ、俺の為に。

あー、しかしラーメンくいてえ。コテコテのどんこつラーメンがくいてえ。

妹が仕込まれました

やあみんな、母親のお腹が気づいたら大きくなっていてびっくりな輝だ、今日も宜しく。

どうやら予定通り仕込みは終わってたようで妹が出来るみたいです。俺に手間が掛からなかったのもあって別の意味で楽しみにしている様子。

しかし妹か、妹萌えとか無いけどこう、改めて再会するとなると緊張するな。コーゲン1・3倍に増加しそうだな。

妹が出来るから母親がとられたような感覚に捕らわれたんだっけなあ。今は無いわ、むしろ親父と一緒にいる方が楽しいし。

「ねえ、あなた、名前はどうしましょう」

「そうだなあ……」

茜だろ？ 輝と茜だろ、分かってるよ、すでに分かっちゃってるよ俺。安直なネーミングセンスにはもううんざりだよ。

まあ、予想通りその後茜に決まったわけだが、その間俺は親父の書齋で読書だ。

読んでいる本は六法全書、え？ 何でこんなのがあるって？ 知らん、なんかあった。

正直詰まらん、かなり詰まらん。こんなの読むくらいなら絵本の方が面白い。けど家にある本全部読んでしまったのでこいつを読むわけだ。

ぶっちゃけ暇なんだよ、1日なげえんだよ。やること無いんだよ。

どこぞの幼なじみみたいに一日中寝てるのも飽きるし、かといって外に遊びに行けるような年齢でもないし。

せめて3歳か4歳くらいになりてーよ、わりと切実に。

しかしこいつも飽きてきた、なんか殆ど頭に入っちゃったし、いや完璧じゃないけどさ、弁護士とかなる予定ないし。

なんか他の本、と思ったが本棚が高く、引き出せる力もないので親父を呼ぶことにした。

「おやじー」

「おい、早苗、お前なんて事教えるんだ」

「え？ 私じゃないわよ！ 私なんてかーたんって呼ばれたのよ！ ママ飛ばされちゃったのよ、でもかわいいから許すわ！」

なんか騒いでる。そうか、いきなり親父はまずかったか、しかたがない。

「とーたん」

「あれ、なんだ気のせいかな？ いやまてまて、そんな事はないはずだ」

「いやねあなた、疲れてるんじゃない？」

もうどうでもいいから本取ってくれよ、背が足りなくて取れないんだよ、重たいんだよ。暇なんだよ、暇つぶしさせてくれよまじで。

「この子は本が好きねえ、でも六法全書って読めてるのかしら……」

「本をめくるのが楽しいんだろ？ 先週は辞書めくってたぞ」
「そういいながら本棚から適当に何冊か出してくれる親父。おお、そいつは俺がまだ読んでない奴じゃないか、っておいおい、クラウゼヴィッツの戦争論じゃねえか、何でこんなもんが家にあるんだよ。こっちは国際関係論かよ！ わかるかよぼけえ、社会人だってわかんなえよ、こんなの渡すなよ。」

「あなた、そんなの渡してどうするのよ」

「いや、輝なら読みそうな気がして」
「ほう、そいつは挑戦ってことかい親父？ いいぜ、不祥輝、期待に応えようじゃねえか。俺の背中についてきな！」

「って、わかるかぼけえっ！」

「いい、わかった、わかったよ。世界はそんなに甘くない、やり直すことになったとしても分かんないものは分かんない、そいつを認めようじゃないか。」

「だが、そこで終わっていいのか、そこで立ち止まっていいのか、人とは何だ、進化しつづける事に意味があるんじゃないのか、そうだろう由美！」

「んー、んと、あーちゃん！」

「あーちゃんじゃねえよ！ 聞いてたのかよ、この熱い思いを、人とは何か、それが永遠のテーマなんだぞ。」

「いやいや、いかんいかん、俺の説明の仕方が悪かったんだな、すまない、それは俺が悪かった。たとえ2歳に近づこうと日々努力している俺とお前だが、この話はまだ難しかったかもしれん、大丈夫だ、俺は分かっている、お前がいつか理解してくれる日が来ることを、まってるぜ相棒！」

「あいぼ？」

ロボットじゃねえよ！ ホンのロボットじゃねえよ、でもそれもまたいい！ そのボケは満点をくれてやる。お前は将来大成するぞ、たぶんだけど。

「今日は二人仲いいわねえ」

「いつも由美ちゃんが輝ちゃんに迷惑かけててごめんなさいね」

「あら、そんな事無いわよ、うちの輝だってね」

「
あーやだ」

「そういえば」

こりゃ2時間コースだな、なんでこう主婦の会話って長いんだろ
うな、永遠の謎だ。区切りをつけようぜ何事も。人生長いようで短
いんだからよ。

とにもかくにも妹が生まれるまで後少し、それまで気楽な独り身
ライフを満喫するとするか。

「だっ」

「キャン」

ポッキイイイイイイ！

妹が生まれました、そして死ぬます

妹生まれたよ、茜。ちょっとまじかわいいんですけど茜。なにこれ、俺死ぬの、可愛すぎて死ぬの俺。

もう、絶対嫁にやらねえ、俺が養う、俺が一生養うよまじで。これはマジで勉強しよう。英語にドイツ語にフランス語に、韓国語と中国語、ロシア語もだな、やったるで、兄ちゃんやったるで！外国語がしゃべればそれだけでステータスだからな！まかせとけ。ああ、しかし可愛い。

妹萌えとか無いって言うてた俺を殴りたい、泣いても、殴り、たい。

くそう、こんなに可愛いとは思わなかったぜ、まるで別人だ。

はっ、どうしよう、知らない奴らに襲われるかもしれない、やばいやっぱり武術も習う必要があるな。

「かーたん、俺剣道と空手と合気道と柔道とボクシング習いたい」

「んー……、あきちゃん。もうちょっと大きくなったらにしようね、それとそんなにいっぱいは無理だと思うなーお母さんは。でもなんで急に習いたいのかな？」

「野獣退治」

「野獣つて……」

男なんて全員野獣だ、妹の半径100mに入った奴は全員処刑だ、皆殺しだ、フハハハハ。

「あなた、あきちゃんがまた変な笑いを……」

「放っておきなさい、いつものことだろう」

「いつもって、貴方といつも一緒にいるからああなったんじゃない！責任とりなさいよ！」

「なんだ、嫉妬か早苗」

「違うわよ！そういう話じゃないでしょ！」

「嫉妬かかーたん」

「あーもおおう！」

母さんもいろいろと大変みたいだな。頑張れ負けるな、茜は俺が守るから！

あ、ちなみに2歳になりました、来年は幼稚園です。今からどうやって幼稚園の頂点に君臨するか検討中です、どうぞよろしく。

トイレも一人でいけるしおねしょなんかしないぜ。幼なじみの由美とは違います、あの子はまだおむつ戦隊ゆーみーマンです。

最近おままごとを覚えて大変です。俺の役所は人生に悲観して全財産を競馬に投資したら大当たりして見たこともない大金を前にうるたえる小市民の役です。こればかりは譲れません、だって楽だもんうるたえてるだけでいいし。

たまにお父さん役とかやらされます。そんな時は人生とは何ぞや、と由美に語ります。そうするとだいたい1分で役所変更になるので重宝します。

いや、ちゃんと遊んであげてるよ。たまにおもちやで殴られるけど許してるもの、俺紳士、本当に紳士。

まじ覚えてろよ由美、この野郎。

おままごと以外には部屋の中でかけつことかですかね。狭いと思う無かれ、この身長だと広いんだよ室内、結構舐めてたね。茜が生まれてからは部屋の中でどたばたしなくなったけど、というか茜の世話が楽しくてやってないけど。

「あかねーあーかねー」

寝とるな、これは起こしてはあかん、あかんよ。寝る子は育つ、いい子に育つんだぞ茜よ。

「あーちやああああん！ あーそーぼー！」

うるせえええええ！ この馬鹿！ 本当に馬鹿！ もう空気読んでよ、茜がおきちやうでしょうが、目ぱっちりしちやうでしょうが！ 育たなくなったらどうするの、身長40センチで止まったらどうするの、責任とるの？ とつてくれるの？ いや、俺がとる！ やべえ40センチの茜とかやべえ、鼻血でる、まじで出る。俺死んでも良い、まだ2歳だけど死んでも良い。

「あかねちゃんだー！」

こらあああ、まてやこらああああ、お前は近づくな、茜に近づくな、触るな触れるな嗅ぐな見るな寄るな思っ感じるな！

「ううっ……、あーちゃんがあーちゃんが……」

ちよつと、まてまてまて、泣くなよ、ここで泣くなよ？ ほらおいでおいで、なでなでしてあげるから痛くないよー怖くないよー、世界は丸いんだよー？ 茜は今超成長中だから起こしたら駄目なん

だよ。

「ちようせいちよー？」

そうそう、ここで起こしちゃうと茜がおつきくなれないから静かにしようね。

「うん、わかった、静かにしてる！」

だからうるせえっての、あーもー、しゃーない、あっち行って何かするか、茜起きちゃう。

「ねえ、早苗さん。あきらちゃんって本当に2歳？」

「私も最近自信がなくなってきたのよ……、なんかもう夫そっくりよ……」

なんだ？ 親父の話か？ 親父は最高だぜ！ 俺親父みたいになりたい。鼻からスパゲティ食べて子供に自慢するような親になりたい！

俺相手に本気でジャーマンスープレックスかけようとする親父みたいになりたい！

あれは結構本気で死ぬかと思った。

昔は結構やんちゃだったんだなあ親父……。

習い事は大事です

あ、どうも輝です。幼稚園の入学式です。なんか制服とか着せられて小さい椅子に座ってなんか聞いてます。

つか椅子ちつちえなあ、こんなになちつちやかっただなあ。

というかそもそも、幼稚園って入学式あったのか、全然覚えてなかった。しかし、どいつもこいつも間の抜けた顔しやがって、そうだと3歳になったから剣道と空手と柔道と合気道とボクシングとレスリングを習おう。1個増えたような気がするけど気のせいだろう。

「あーちゃん、あーちゃん」

お、なんだ由美か？ 大丈夫だぞ、ここは幼稚園だ迷子になつてないぞ心配いらぬ。そしてお前の両親はあそこだ、面倒事は是非向こうに持って行ってくれたまえ。

「ちがうよー。いつしよなんだよー」

一緒？ ああ、そうだな来るとき一緒だったな。横で騒がれて俺は大変だったんだよ、昨日、夏目漱石を読みなおしたらちよつと夜更かしてしまつてな、この子供ボディーには少々きつかったよ。うで眠気がMAXオーバーフローしてたんだよね。その辺察してくれると結構嬉しかったんだけどどうだろう。

「すみれ組なんだよー」

すみれ？ ああ、花の名前ね。スミレ科スミレ属の総称だね狭義にはViolaMandshuricaって言ってその種の和名だ。

春に咲く野草で深い紫の花を咲かせるのが一般的、花は独特の形状で、つてなにさ？ ああ、聞いてないって？ そいつは申し訳ない、そいですみれがどうしたんだ？

「一緒の組なの！」

怒らなくても良いじゃないか、短気は損気、怒ってばかりじゃ背は伸びないぜ。

「のびるもん！」

横に延びないように気をつけてな。

「のびないもん！」

どっちだよ。

「うづう……」

ああああ、ごめんってマジごめんって、俺が悪かったって。機嫌なおしてくれ、ほら、そうだ冷蔵庫の俺のプリンあげるから。

「ほんと？」

ほんとほんと、あげるあげる。そんなに食べたい訳でもなかったから。

「ありがとう！ あーちゃんだいすき！」

いやーごめん俺はそうでもないんだけどね。むしろ茜と一緒にいられたかったよ、茜に群がる虫どもを駆逐したかったよ。

くそう、2歳の差が悔やまれる。なぜ両親は俺を2年遅らせて生まなかつたのだ、恨むぞ。

だがしかたがあるまい、兄としての立場に立っていることに感謝しよう。以前では出来なかったが俺が全身全霊を持って守ってやる、まかせろ茜！

「輝ー、帰るわよー」

お、母さん！ なあなあ剣道と空手と（以下略

「駄目よ、どれか1個にしなさい」

そいつはいけねえよ！ 害虫駆除、じゃなくて日本男児として武道を嗜むのは常識じゃないか！

「よく言った輝！ ならば極めて見せよその道を！」

親父！ 任せとけ、俺は行くぜあの地平線の向こうに！

「あーもうわかったから、じゃあ2個までにしなさい。月謝も馬鹿にならないんだから」

む、金のことを言われると辛い物があるな。しかたがない、じゃあ空手と剣道でお願いします。申込用紙はこれです。

「準備万端ね、輝……」

「おお、父さんが先週集めた奴じゃないか、急に言うから何かと思つてたぞ」

「あなた……？ 帰ったら少しお話があります」

「え、ちよつと、輝？」

親父、心配いらねえよ親父の背中、輝いてるぜ！

「おう、俺の背中についてこい息子よ！」

ああ、どこまでもついていくぜ親父！

「良いから行くわよ馬鹿二人」

とりあえず親父の小遣いが減らされたことだけはここに記しておこう。

幼稚園で出来た友達諸君

メイン、ドー、チャーシューめん。最後のは空耳だとして今は剣道の道場だ。

剣道の防具って高いんだね、びっくりしたよおじさん、10万以上するとは思わなかった。これはもう全国大会優勝する位しないと駄目だね、親父のお小遣的に浮かばれない。

「おお、これは月光さん。やはり小さい頃からこういう武道に

」

「息子がどうしてもって

」

「それは見所が」

「いつまで続くか

」

世間話の良いから早くやらせろよ、あの1個上と思う年長組の野郎がガン付けてきやがるんだよ、潰させる、あの野郎潰させる。

えーと、防具の付け方は覚えてきたからな、問題ない。ってなに？ 準備運動から？ そりゃそうだなすまんすまん。え？ 次は素振り？ まあ、しょうがない初めてだしな。いいだろう100回だろうが1000回だろうがドンとこいや！

おうふ

すみません100回で勘弁してください。まじきつ、ほんときつ、舐めてたまじで。

あん？ なんだあの野郎笑いやがって、くそがつ、4年しか生きてないがきんちよに舐められてたまるかおらああああ。

「すごいですね輝君、最初100回も出来ない子が多いのに、これは才能がありますよ」

「いや、その、そうでしょうか……？」

おりいりいああああ、うるるううおおおりやああああ！

「気合いも十分、これは延びますよ！」

「あの、その、そうでしょうか……？」

うおおおんどやああああああ、せりゅうああああ！

も、死ぬ、駄目……。

あーもー、これ絶対明日筋肉痛だよ、3歳にして筋肉痛だよ、やつてらんねえよ。

「輝楽しかった？」

まー始めたばかりだから何とも。けど害虫駆除に必要、じゃなくて精神の鍛錬のために必要だと思ってるからね。

「それお父さんから聞いたのかな？」

ん？ いや、うん、あ、そうだよ！ 親父の受け売り！

「害虫駆除って言葉もかな？」

え、うーんと、その、うん。

「ふふふ、お父さんと今日もお話だね」

すまん親父許してくれ。

ベツトの上で頑張るか、暴力に耐えるかは任せるよ。もう一人くらいなら兄弟増えても良いよ親父。

まあ、そんな感じで空手の方も順調順調。月、水、金が剣道で、火、木が空手だ。

正直肉体的にはなんもかわつとらんので、毎朝のランニングとかしたい所だけど、まだ3歳だから駄目だそう。仕方がない、もう少しの辛抱だ。

そうだな、しょうがないから幼稚園の出来事でも話そうか。

まずは木田 正臣、同い年の割にはがっしりした体型で悪く言えばデブ、ガキ大将ってやつだ。

初っぱなから俺に突っかかってきやがったから人生の儂さを思い知らせてやった。

次は香坂 哲平、物静かな奴だと思っただけどわりかし面白い、お調子者で強い物に巻かれるタイプ、でもここぞというときはしっかりする、見たいに育てたい、あれ、ちがう？

んで、斉藤 碧、由美と意気投合した元気いっぱいの子、しかし碧も由美も将来美人になるだろうな、由美はまあ知ってるけど。大体いつもこの5人でつるんでる。

だが言いたい、俺は声を高くして言いたい、茜が一番だ！

俺はもう茜のために生きるよ、まじ茜以上の女とかいねーし、え？ ちがうよ妹として愛してるんだよ、無償の愛だよ。なんか訳の

分からんこと言ってるな？ 妹と結婚できるわけ無いだろ？ 頭大
丈夫か？ そんなの常識だろ。

でも妹は嫁にやらん、俺が養う。見てろ、にーちゃんががんばっちゃう、まじで頑張っちゃう。

英語とかもう余裕だし、今フランス語勉強中。親父に言えばすぐ用意してくれるからな、母さんは駄目だ、なんか常識がどうか、天才児よ！ って騒ぐし。マスコミとか嫌だから程々でいいんだよ
対外的には。

あ、そうそう先生は大木 真奈美先生。Dカップって言ってたけどあれはCだな。

「ちよつと！ 輝ちゃん何言ってるの！」

なんだCカップ、文句あるならハインリッヒの法則について説明してからにしろ。

「え、ハリン、リヒ？」

ハインリッヒだねえちゃん。

「え、なにそれ、ハインリッヒ？ まって輝ちゃん、違うよ知ってるよ、知ってるからまって！」

携帯で検索禁止だよ先生。

「う、ううう……」

ちよ、おい！ 先生泣くなよ！ まじごめんって先生俺が悪かったって！

「先生……、入学当初から問題起こした生徒も止められないし……」
あー、女の子の髪ひっぱってた奴ね。女に手え挙げて、てめえは

明日の朝日が美しく見えるのか、てめえのハートはたぎらねえのか、女つてえもんは守るべきもんだ。騎士という二文字、それを知らんのか！ って熱く語ったら兄貴つて呼ばれるようになった件だな。ちなみに俺は妹限定だ。

「子供に怪我させて親御さんから文句言われるし……」

あー、転んで怪我した奴ね。てめえらは子供を温室育てにして満足か、それはてめえらが満足してるだけだろうが！ あいつを見る！ 怪我をした後すぐに楽しく遊んでるあいつを見る！ おまえ等はその笑顔を否定してるんだよ、潰してるんだよ、それがわかんねえのかよ！ って熱く語ったら泣いてた親御さんね、覚えてるよ。

「歌を歌ってくれないすみれ組のみんな、いつつも騒いでどうしようか困ったり……」

最初はそうだったなあ。目標はねえのか、お前等！ お前等は明日に何を見ている、俺は先生の笑顔を見ている。お前等はどうかどうなんだ！ 笑い顔が見たくねえのか、俺達が笑わせてやるんだ、この不景気に喘ぐ日本を俺達が笑わせてやるんだ！ 俺達に出来ない事なんて無い、無限の可能性を秘めているんだぜ俺達は！ ってしゃべってたら気づいた時にはスマレ組じゃなくて、年少組全員で大合唱してた時の話ね、あんどときぼろ泣きだったよね先生。感動と言うより混乱とむしろ恐怖で。

「うん、なんか思い出したら輝君先生やればいいんじゃない……」

へいへいへい、俺まだ3歳だぜ、もうちょっとで4歳だけだよ、そんな子供にまかせちゃーあかんよ。あかんあかん。まだいける真奈美まだいける！ 大丈夫俺が付いている！

「あー、なんか園長先生が付いているより安心感があるのは何でだろっ」

とりあえず今日会議なんだろう？ 会議資料つくつとけよ。来月の発表会の音作りとかいろいろ残ってんだろ？

「あ、うん、でもお歌の授業が」

あー、いいっていいって、俺に任せとけて。なんならアメイジンググレイスとか歌わせとくから、英語バージョンで。

「いや、それすごいよね。3歳児それ歌ったらすごいよね、でもなんかやりそうだからやめて、わりと切実にやめて」

なんだしようがないな、まあカエルの歌くらいにしとくか。

「うん、それでお願い……」

りょーかい。まったく、世話の焼ける先生だぜ。

仁義なき戦いスミレ組の乱

「あーちゃんなにやってるのー？」

あん？ おお、由美か、さつき先生からカエルの歌やってくれって言われてな。とりあえずドイツ語で行こうと思っただがどう思っ？ それとあーちゃんだと茜とどっちか分からなくなるからあきちゃんとかにしてくれ、割と切実に。

「どいつー？ どいつってなあに？ 後あーちゃんはあーちゃんだよー！」

あーちゃんはあきちゃんなんだよ、今この瞬間あきちゃんに変わったんだよ。世界的な変革が起こったんだよ、だからそうしとけやこの野郎。

つーか、まあそんな事はどうでも良いんだよ、ドイツ語でカエルの歌やるから皆呼んどけ、ああ、いいや俺が呼ぶ。

おらあ！ スミレ組いい！ 集合せいやあ！

「へい兄貴！ 組員集合いたしやしたぜ！」

おう、俊平ご苦労。おめえらあ、スミレ組の訓示を述べやがれ！

「仁義、任侠、酒と喧嘩は江戸の華、筋通さねえ野郎はぶっ潰せ！ おうよ！ いいかおめえら俺らの組長の真由美が仕事だそうだが、歌の時間らしいがそっちを優先してもらった、俺達が負担になっちゃいけねえ。神輿担いでる俺達が甘えちゃいけねえ、わかっただら？ 何かあつたら俺に言いな！ 鬼の副長がケツもってやんぜ！」

「「「いえっさー！」「」」

ようし、じゃあ歌の練習だ！ 今から配った用紙通りに発音すれば問題ねえ。

「あーちゃん、これ何の歌なのー？」

ふ、参謀ゆみよ、お前も良く知ってる曲さ、そいつはカエルの歌ドイツ語バージョンだ。

いいかお前ら、常に俺たちは時代の先端を走らなけりやならねえ。それは何故か？ 前も言ったと思うが次の世代を担うのは俺達だ、俺達が日本を支えていくんだ、ならば今から時代の最先端をとつちまう、そう考えた。

将来？ はっ、笑わせる。舐めてもらっちゃ困る俺達は将来にならないと時代を引っ張っていけねえのか？ ちげえだろ！ ちげえだろつ皆！

俺たちは今からもう行ける、行けるんだ、立ち上がれ！ 俺達にはその力があるんだぜ！

「「「あきらくん！ 僕達（私達）がんばる！」」」

ようし、いくぜ！ 俺についてきな！

「真由美先生、すみれ組が騒がしいのですが……」

「ええっ、お歌の授業中のはずなんですけど」

「いやあ、真由美さん凄いですよ、ドイツ語ですよ。僕大学の時選択してたからなんとなく聞き覚えがあったんですけど」

「真由美先生、ちよつとお話が」

「え、ええええええええ」

なんか悲鳴が聞こえたな、まあ気のせいだろう。

だが、ソウルブラザーたるこいつらも良いやつらに育った、組のモンも他の組との抗争が偶にあるみたいだがスミレ組は負け知らずだ。組に負けは許されねえ、ダチの負けは組の負け、ダチの恥は組の恥、ダチの借りは組の借り、俺達の義兄弟の契り舐めちゃいけねえぜ。

これで来月の発表会も余裕でトップだな、たんぽぽ組やあさがお組なんざ勝負にすらならん、年長組すら食ってやるぜ。

フフ、フハハハハ。

「あきらくんがまたへんな笑いしてるよー、ゆみちゃんだいじょーぶかな？」

「えー？ だいじょーぶだよ。あーちゃんいっつもあんな感じだもんー」

なんだ、失礼な事言ってるな。いつもじゃないぞ、茜の前では超猫被ってるから、30枚くらい被ってるから。超いいおにーちゃんだから。ああ、茜に会いてえ。茜禁断症状が出てきた、まじ死ぬ、死ぬ、ほんと死ぬ。

意識が朦朧としてきた、こっぴつときは懐のこいつで。

懐から出すのは一枚の写真、そこにはきゃっきゃと笑いながら此方に微笑みかけてくる茜が写っている。

ふひ、うひひひ、かわゆすぎる、やばすぎる、もうだめ、俺死ぬ。

しかーしまだ死なん！ 茜に付く悪い虫を全て駆除するまでは死

ねん、俺は死ねんだ！

しかし茜も1歳、まじかわいい、最初にしゃべったの『にーに』、だぜ。両親を抜いて俺が最初だ、もう俺死んでもいい、三歳だけで死んでも良い。

まじもー、俺一生かけて貢ぐわ！ 茜に貢ぐわ！

お年玉とか全部茜行きだな、翻訳の仕事とかするかな、3歳じゃ無理か、悔やまれるこの何も出来ない年齢が悔やまれる。だがあんまり年が離れると妹を守れない。ギリで1年生と3年生のレベルだ、なんか対策を考えないといけないな。

「あーちゃん、あーちゃん」

ええい、なんだ。俺は今、全人類男子撲滅計画を練っているんだ、邪魔をするな！

「なんか園長先生がきてるよー？」

あん？ なんだ？ 俺に用か？ 組のモンが迷惑かけたんか？ わりいな副長の俺がケツもつぜ、なにがあつたんでえ？

「輝君、すみれ組はヤクザじゃないからね。さっき歌ってた歌なんだけど、輝君が教えたのかな？」

おお、カエルの歌か。ただ歌うだけじゃつまんねえからな、ドイツ語バージョンにしたんだ。まあ発音がまだまだ甘いけどよ、結構な出来だと思っぜ。

「ええと、普通に日本語で良いのだよ？」

園長先生、あんた駄目だよ、ほんと駄目だよ。型にはまって楽しいのかい？ 人生それで楽しいのかい？ そりゃあ人様に迷惑かけるような事はいけねえよ？ そいつはいけねえ。けどな、ただ言

われたとおり、今までやって来たことをそのままなぞって出来上がる人は良いもんかい？ それで子供達の人生をレールにのっけまっつていいんかい？ ちげえだろ、あんたの仕事は子供の可能性を延ばすことじゃねえのかい？

教育者としてその夢を追ったときの事を思い出そうぜ、入学式のあの時、春の風、春の匂い、その思い出、その熱く滾っていた思いを思い出そうぜ園長先生！

子供を常識にはめ込んで将来性を奪うような教師になるのがアンタの夢だったんかい！

「そ、それは……」

そうだろう、ちげえだろう？ わかる、俺にはわかる、園長先生も大人になっっているんしながらみがあるのは分かってる、分かっているさ。だから無理はいわねえ、けどな？ 俺の組のモンは可能性を潰さないで欲しいんだ、心配いらねえ、俺がケツ持つからよ。

「あ、あのだね、それとこれとは違って……」

そいつはちげえ！ 逃げちゃいけねえよ先生！ あんたの思いは何処に行った！ 教師の心は何処に行った！ 俺はアンタを尊敬してるんだ、いや世界中の幼稚園児がアンタに期待してるんだ！ やってくれるって、やってくれるって皆期待してるんだ、その期待に答えないでどうするんだよ園長先生！

「そ、そうだな、そうだった。よし、やりたまえ輝君！ 大丈夫大人は私が説得してみせる！」

へっ、良い目になったじゃねえか園長、いや、ソウルブラザー。

アンタなら出来る、世界中の幼稚園の頭に立てるぜ。

「ちよつとおおお！ 園長先生説得されないで下さいー！」

「園長せんせええええ！ なに子供に説得されてるんですか！」

「フ、何を言ってるのかね近藤先生、斉藤先生。今の私はプリスクールグレートティーチャーエンチヨー。略してPGE、今の私に不可能はありません」

「あああああ、園長先生まで壊れたあああ」

「絶望した！ 就職先を間違ったことに絶望した！」
うるせえなあ、一人の男が夢を思い出したんだろ？ 何をそんなに騒いでいるんだよ。

「あんたが原因でしょおおおおお！」
はあ、瑞穂ちゃんよう、そんなんだから静雄さんに振られるんだぜ？

「なんであんたがそんな事知ってるのよおおおおお！ もうやだ！
もうやだ！ この幼稚園もうやだあああ！」
あーもう、泣くなよ瑞穂、ほら、胸かしてやるよ。泣けよ、俺が傍に居てやるよ。

まったく、世話の焼ける先生が多い幼稚園だぜ。

茜の為なら何でも出来るそれが兄貴クオリティ

幼稚園では運動会つっもんが年に1回ある。親との二人三脚とか、まあそんな感じのだ。先生方が頑張って作ったであろうキャラクター製の手作り感たっぷりな門とか、どっから持ってきたのか良く分からないぬいぐるみを被ったりとか、まあ、いろいろと大変な訳だ。

そんな苦勞を無くしてあげようと色々手を尽くしたのだが何故か、組長に泣き付かれてしまった、まったく訳がわからん。

「輝ちゃああん！ 組長じゃないから真由美先生だからああああ！」
なんだ組長、組員は全員いるぜ？ そんなに大声で言わなくても聞こえてるから大丈夫だったの。

「大丈夫じゃないよ！ なんなのこれ！ 誰が本物のキャラクターを呼べって言ったのよおお！ それにこの門なんなのよ！ 自動式で幼稚園より大きな門ってなんなのよおお！ なんで幼稚園の運動会でクレインが敷地内に入っているのよおおおお！」

ふう、全く分かっていない。こいつは可動式の門で2階建てなんだ。2階からは侵入者に対抗する為に射撃用の窓も作ってあるし、門は指紋認証付きで200mmの鋼鉄鉄板を使用したからな。コンバットマグナムでもぶち抜けねえぜ。

「何に備えてるのよ！ そんなの撃たれないから！ 撃たれないからああ！」
心配するな、ちよいと伝手を使ってプロを呼んでるからな、問題ねえよ。

「プロってあれなの！ 迷彩服着たあの外人部隊なの！ おかしい
と思ったわよ！ コスプレに見えなかったわよ、本格的な部隊じゃ
ないのよおおお！」

おうよ、中東の紛争地域でドンパチやってる所無理言っつて来て貰
ったんだ。腕は確かだぜ。

「来てもらわなくて良いわよ！ とうか何で来るのよおおお！」
まったく、そんなに騒いでたら疲れるぜ。運動会が楽しみなのは
わかるけどよ、ペース配分は程ほどにしておかねえと駄目だぜ先生。

園長先生にもちいと挨拶に行かないとな。やっぱり命令系統はしつ
かりしとかないと何かあったとき各個撃破されるとまずい。あん？
なんでこんなに嚴重なのかつて？ 馬鹿野郎、どいつもこいつも
わかつちやいねえ、今回は茜が運動会を見にくるんだよ！ 何かあ
つたらどうすんだよまじで！ 茜のかわいさにおもわず1個中隊と
かで攻めて来られたらどうすんだよ！ 徹底抗戦するためには武力
が必要だろうがっ、どいつもこいつも分かつちやいねえ。

とりあえず当日はアパッチ飛ばして嚴重警戒だ、と思ったんだが
そいつは流石に無理だったぜ、警察庁長官にちいと何枚か写真送っ
たんだが外人部隊の滞在だけしか許可してくれなかったんだ、ケチ
な奴等だぜ。

「ちよつとおお！ 国家権力脅しちやだめえええ！」

脅してねえよ、お話ししただけだよ、問題ねえよ。しかし、武装
が貧弱なんだよな、やっぱり各自AK-47は欲しい所だったんだ
がな。

日本ちよつと頑張りすぎなんだよ、規制厳しすぎなんだよ。まあ、
しょうがない、妥協が大事だつて事はこの3年で理解した。妹の事
で妥協はしたくなかったがやれる事とやれない事が有る、そこは我
慢しよつ。

前回の学芸会だったかではドイツ語のカエルの歌で会場が騒然となったからな、あんまりやりすぎちゃいけない事は学んだ。俺だって成長するんだぜ、マイクロファイバー製の吸収力舐めちゃいけない。戦争論だつてもう余裕で読めるぜ、フランス語も大分覚えたしな。今回の部隊は英語でいけるから全然問題ねえ。

「輝ちゃんおねがい、お願いだから彼らに帰ってもらって……」
「な、なんだと、そ、そんな馬鹿な。茜を無防備にしると言うのか！俺に死ねと言うのか、先生は俺を見捨てるのか！」

「違うから、全然違うから、日本だから、安全だから……」
「そんな事は無いだろう！日本だから？日本だからだつて？そんな事は無い、真奈美は考えが甘い。茜の可愛さに対する考えが甘い！」

あの可愛さは第3次世界大戦が始まるレベルなんだぜ！わかってんのか！

「先生が頑張つて守るから、ちゃんと守るから」

「ああん？まあ、真奈美の心意気は受け取るよ、その思いは受け取る、その熱い思いは大事な事だ。わかった、俺も漢だ、彼らには園外で守ってもらうことにするよ。」

そこが妥協点だ、勘弁してくれや組長。

「うう、もう無理です、私きつと先生に向いてないんだ」

「そんな事はねえよ、俺先生大好きだぜ？スマレ組、組長真奈美は皆に愛されてるぜ、自信持てよ真奈美。輝いてるぜ真奈美！あんたが世界で一番だ。」

あ、それとポッキーって俺の家の番犬なんだけど、こいつも当日

幼稚園に入れるから。大丈夫こいつは俺の初めてのソウルブラザーだ、めっちゃかわいいけど油断するなよ、前足には簡易スタンガン、首には麻酔針、尻尾にはGPSが付いてるからな。

「それ動物虐待よね、輝ちゃん駄目よそんな事しちゃ」

何言ってるんだよ！ ポツキーだって茜を守りたいんだ、茜を守りたいっつうシンパシーを感じてるんだ、その熱い思いに答えないでどうするんだ組長！

つぶらな瞳でいつも俺に語ってくるんだ、やってやるぜ兄弟ってな。そう、ポツキーは俺の相棒なんだ。ルーベンスの天使の絵は見に行かないけどな！

今から運動会が楽しみだぜ！ なぁ皆！

「こっへい！ 親分！」「」

「ちょっとおお！ 呼び方がわってるじゃないのおおお！」

日々同じじやマンネリだろうがよ、常に進化するそれが子供の特権だぜ組長！

世界は俺達を引き裂こうと言っのか

よう皆、年中組になった輝だ宜しくな。そういや前話した運動会ではちいとパトカーが数台出勤する騒ぎがあったみたいだがとりあえず問題は無かった。あえて言うなら茜が可愛すぎた、もう可愛すぎた。わかっていたが可愛すぎた。

年中組になってやることは対してかわらねえ。まああえて言うなら組つうより幼稚園、いや園全部で一つの組になっちまったくらいだな。大した事じゃないから気にすんな。

そんな事より今は俺は最大の危機に面している、世界恐慌よりもやばい状況だ、こいつはやばい、全身から噴出すこの塩水という名の汗、というか鼻血出そう。

「にーに、やー、あそぶー、一緒にあそぶー」

「だめよ茜、お兄ちゃんは幼稚園に行く時間なんだから」

「いいや、まちたまえ母よ、幼稚園とかしらねえ！ いかねえ、こびねえ、かえりみねえ！ 茜がつ、茜がああああああ！」

「ほら、騒いでないで良いから行きなさい輝」

「ごはあつ、ひ、ひどい。これは酷すぎる裏切りだ。茜の思いを踏みにじれというのか母さんよ！」

茜が遊ぶって言うっているんだ！ 幼稚園なんてどうでも良いだろうがよおおお！ そうだろう親父！

「お父さんはもう仕事行ったわよ、輝もさっさと行きなさい」

まじかつ、なんてこった、この家にはもはや味方は居ないと言う

のか。いや、だからどうしたというのだ。逆境！ そう逆境こそ漢を見せる時！ 茜が泣いてる、女が泣いてる時に駆けつける漢になれねえでどうするってえんだ！

たとえベルリンの壁よりも高い障害があろうとも、いや、障害があるからこそ俺は駆けつけてみせる。俺のこの魂にかけて駆けつけて見せるぜ茜！

幼稚園は休みだ！ 自主休園だ！ お前の為なら法律すら変えてみせるわああああ！

「はいはい、良いから行きなさい。由美ちゃんも待つてるわよ」「
なんという仕打ち、なんという事実、なんという現実。もはや神など居ない。死ねと言うのか、世界は、神は、現実には俺に死ねと言
うのかっ！

「あーちゃん！ おーはーよー！ あーちゃんどうしたのー？ 元
気ないよ？」

ほっといてくれ、俺は今人生に絶望している所なんだ。だからち
よつと地球の自転で48度くらい回るまでそっとしておいてくれ。
ラップダンスとかしてくれなくて良いから、テンション上がらな
いから、もうだめだ、俺もうだめだ、鬼の副長も落ちたもんだぜ…
…。

「あーちゃん元気出して！ あかねちゃんが来てるよー？」
驚き外を見ると母さんに抱かれた茜がそこに！

あかねえええええ！ すまねえ、俺が力足らず、力及ばず、一人
にする事を許してくれ。俺強くなる、誰よりも強くなるから、すま
ねえ、すまねえ茜……。

「せんせい、あーちゃんがマジ泣きしてます」

「ほっときなさい」

「そりゃないぜ先生……」。

男は背中で語るもんだぜ

カラン、とグラスの中で踊る曲線を描いた氷が年代物のスコッチを？き分け、グラスのグラスにキスをする。

ジャジーなBGMをバックに、こくりとそのグラスに注がれたスコッチを飲む男が一人。背は180はあるだろうか、短く借り上げたアッシュブロンドの髪と頬に刻まれた傷、そしてその鋭い目つきが、ただの一般人じゃない事を表している。

捲りあげた腕は太く丸太のようで、その先にある手、そしてその指はまるで岩の様に堅く、そして血の匂いが染み付いているような錯覚に囚われる。

カラン、とまたグラスの中で氷が踊る。少しだけ表面を溶かし、面積を縮めた氷をその鋭い目で見ながら光に翳す。

ふ、と口元を歪め、隣に座るレディーに向かってその男はしゃべりだした。

俺の名はゴルバス、中東の紛争地域で戦争をしている所詮傭兵つてやつだ。あちらこちらから集まる猛者を集めて一つの軍隊に仕上げた。自分でいうのもなんだがかなりの部隊だと自負している。

そんな俺達にとある要人の警護の依頼が舞い込んだ。場所は日本あの安全な国で俺たちの腕が必要になる理由が良くわからなかったが、頼んできたのは以前借りを作ったことのある奴だ。殺す事しかしらねえ俺達に護衛が勤まるか甚だ疑問だったがまあ、折角だ、休暇もかねて日本に行こうと決めたわけだ。

しばらく戦争の空気しか味わっていなかった俺たちには、場違い

な空気がそこにはあった。しかし俺たちはプロだ、与えられた任務を忠実に遂行する、それが俺たちの仕事だ。

詳しい資料を見るとどうやら警護対象は、まだ1歳の少女だと言う。何かの間違いかと思っただがどうやら本当の話の様子。依頼者が来るというので、そこで詳しい話を聞こうと指定の喫茶店で時間を潰すことにした。

しばらくしてやってきたのは小さな餓鬼が一人だけ、どうやら時間も守れないような雇い主のようだ。まったく、勤勉な日本人はどこへ行ったのかと思っただらその餓鬼が依頼者だと言っただけか、とんでもねえ話だ。とりあえず飲んでいたコーヒーを鼻から盛大にリバーズしちまっただけ、痛いのはなんのって洒落になんねえよ。

さらに話を進めると本当に冗談じゃない事実が発覚するわけだ。なんせ聞くところによるとまだ3歳だっただけじゃねえか。こんな餓鬼に使われるなんて傭兵を舐めているとしか思えない。そう、俺はそう思っていた、その瞬間までは。

舐めていた、日本人つうもんを舐めていた。こいつは半端ねえ、たった30分の話し合いだったが侍が未だ日本にいることを実感させた。

あいつの目の奥で燃えるソウルファイヤーは伊達じゃねえ。まさに日本魂を見せてもらった。

そうして見ると纏う空気が既に違う、俺はもしかしたらこの極東の島でとんでもねえ奴と出会ってしまったのかもしれない。

人を殺す事しか知らなかった俺に新しい世界を見せてくれる、そんな夢を、いや白昼夢を見せられたんだ。

驚いたぜ、戦争地帯で感じるような背筋の冷たさと極度の緊張感が俺を襲うんだ。もはやそこはただの喫茶店じゃねえ、歴戦のツワモノ同士が睨みあう一触即発の危機的状況な訳だ。

3歳なんてのは所詮数字の並びにすぎない、そのボーイはそう言った。確かにそうだ、こいつのハートは、グレイツハーツは、その思いは、その情熱は、俺の魂を、心臓をゲイボルグでぶち抜かんばかりに熱かった。

クランの猟犬もびっくりの手際だぜ。

依頼内容はこのグレイツハーツボーイの妹の護衛らしい、たしかにこのボーイの妹ならば、何かあったとき国際問題に発展する可能性があるとと言われても理解できる。

そういうことが、だからこそ俺たちが呼ばれたのか、中東の英雄と言われる俺たちだからこそこの使命か。

俺は初めて任務を任された理由を知った。そして感動に打ち震える。ここまでやりがいを感じる仕事があったらどうか、ここまで熱い思いをかけて戦う日があったらどうか、いや、ない。

単独潜入で戦車に立ち向かったときも、戦争へりと正面切って打ち合ったときも、ここまでの熱いソウルに震える事はなかった。

俺は自然とそのグレイツハーツボーイに敬礼をしていた。

この俺が、形式上でしか敬礼をしなかったこの俺が、心の底からこの男の為に敬礼をしたのだ。

だがその男は言った、俺たちはもうソウルブラザーだ、敬礼は必要ないぜ軍曹、つてな。

熱い、熱いぜ、このたぎる情熱、熱すぎるぜ。

だから俺はこう返したんだ。

ああ、すまねえ大佐^{カーネル}、アンタに付いていく。これは俺だけのセンチじゃねえ、隊の、俺たち隊の総意だって思ってもらってかまわねえ。ブラザー、死ぬときは一緒だぜ。

あの時、熱く交わした握手は今でも忘れられねえのさ。確かに小さい手だった、けどな、その目に見えるもんだじゃねえ、俺のハーツにガンガンとロックンロールが鳴り響いてディスティニー。そして俺をブロークンハーツな訳だぜベイビー？

まあ、そんな訳さ戦争をやめてこっちにいる理由はな。わかったかな、キャシー？

「で・す・か・ら！ 私、大木 真奈美です！ キャシーじゃありません！ というかもう意味わかんねえよ、もうわかんねえよ！ もうわかんねえよおおお！」

夜の街、一晩の夜遊びにふける男と女のラプソディー、また一人不幸な女性が嘆きの鐘をかき鳴らす。

嘆きの鐘がかき鳴らされる時、それは深遠に近づく一時のメロディー。そこに立つのは英雄か、はたまた……。

芸術なんて魂で感じるものだろうがっ

「あーちゃん、あーそーぼー！」

「ああ、由美か、茜成分が不足してる俺に何を求めてるんだ？俺に何を求めているんだお嬢ちゃん。俺は今ガソリンが無いベントツ、バッテリーの切れたアイ、コンセントが行方不明のテレビ、つまりは役立たずって奴だよ。」

「さばくであそぼー！」

砂漠じゃなくて砂場だろうが、砂漠で遊ぶとか流石の俺もきついで。干からびちゃうぜ、まだミイラの仲間入りは勘弁してもらいたい所なんだ。

しかしまあ仕方が無い、いつまでも落ち込んでてもしょうがないからな。正臣、行こうぜ、俺ちよっと元気であつたからよ。

「大丈夫か輝、まじさつきまでのお前、周囲だけ世界がゲシユタルト崩壊していたぜ？」

「そうだね、まじ崩壊してた、というか崩壊すれば良いのに。いや、だめだ、こんな考えじゃ駄目だ。こんなうじうじした俺は俺じゃねえ、こんな簡単に凹んじゃいけねえ！そうさ、魂を燃え上がらせろ、立ち上がれ俺！立ち上がれガンム、立ち上がれ大仏！大仏よう、お前いつも胡坐かいて大変だろうよう、だからよう、ちよつとよう、立つてくれねえかよう。」

「あーちゃんがまた変なこと言い出したよー」

「由美、先に行ってようぜ、こうなったら暫く戻ってこないからよ。まてえい！まてまてまて、俺も行く、今閃いた、つくろつじや」

ないか砂場、そう砂場の王、俺は今日砂場の王になる。

組の連中を集めな、いくぜフリーイダム！ 俺達の世界は俺達で作る！

「へっ、戻ってきたな輝、待ってたぜ輝、いや副長！」

すまねえな正臣、ちいと迷惑をかけちゃまったようだ。俺としたことが手間かけちゃまった、この借り、わすれねえぜ。

「気に済んじやねえよ、ダチだろう？ 俺達ダチだろうよ！」

おうよ！ いくぜフリーイダム！

「それで？ 何を作るんだい副長」

平等院鳳凰堂、こいつでいく！ 聳え立つ巨頭、それに挑む俺達、不可能を可能とするその過程、進捗、進化、進撃、激震、撃滅、そう、今こそ俺たちは歴史に名を残す時。トゥルウウウス！

いくぜ野郎ども、夕日に向かって駆け抜ける！ 砂浜は最早戦場、容赦はするな、組の敵はダチの敵、ダチの敵は組の敵。

立ちふさがらなぶちのめせ！ 俺達が、俺達こそが、そう、俺達こそが鳳凰堂！

砂とて俺はあなどらねえ、油断なんてしねえ、そこにある、そここそが伝説、そして砂。そう、砂無限に広がる可能性、そしてプラネッツ、無限に広がるプラネッツタイム。

さあ、いくぜ！ 夢を叶えるフレンズ！ 世界は俺が回してるっ！

そうして平等院鳳凰堂は出来上がった、園長もといPGEが涙を

流しながら感動していたのは良い思い出だ。

ワシは相良 権蔵、人間国宝などと世俗に塗れた称号を、不本意ながら頂いた人間だ。所詮人間なぞ国宝になれるほどの価値など無い、いや、そもそも国宝とはなんだ、栄光なのか？ くだらない。ワシはワシの作りたいものを作っておるだけと言っのに。

ワシは煩いマスコミの連中と、次回作を、と求める馬鹿どもから離れ、一人外を歩いている。

どいつもこいつも芸術と言うものを分かっておらん、一言目には金、金、金だ。

醜い人間ばかりでやってられない、ワシの作りたいものを、ワシの魂を理解してくれる人間など何処にもいない、そう思っていた。

ワシは自分の目を疑った、気が付いたらそこに居たのだが、良く見ると幼稚園。だがその中の景色は幼稚園とはとても思えない光景だった。

砂場に平等院鳳凰堂が建っているのだ、それも砂で。

何度も何度も目をこするがその現実が消えてくれない。まさか、そんなまさか、いやきつとプロの人間が、と思うがそれも直ぐに否

定される。

指示をしている人間が居たのだ、明らかに幼稚園児、明らかに4歳か5歳児、明らかに100cm無い身長。

ありえない、まさかこんな、ありえない。

ワシは自然とその幼稚園児の元へ足が進むのを自覚した、止められなかった、このありえない現実の前にこのワシが、このワシが感動すらしてしまったのだ。

君は何者だ、思わず聞いてしまった、何を聞いているのだワシは。たかが幼稚園児になにを……。

しかし、直ぐにそれは間違いでなかったことを理解する。声をかけた事それこそが運命、それこそがデイスティニー。

そう、ワシの声に振り返ったその幼稚園児。その目にはワシの若かりし頃の情熱の炎が宿っていたのだから。

「俺かい？ 人は俺の事をこう呼ぶ、月光 グレイツ 輝、とな。グレイツでいいぜブラザー」

ブラザー、なぜブラザーなのだ。急に兄弟にされたワシは戸惑う。英語だって問題ないワシはその意味を理解していたのだ。

「あんたの目、その魂のソウルファイヤー、ブラザーの証拠じゃねえか。他に言葉はいんのかい？」

雷が落ちた、いやまさにワシの中で、指先から爪先に至るまで痺れた、まさにシビレタって奴だ。こいつはばねえ、こんなところで芸術の真髄を知るものに会う事になるとは。

そう、芸術とはソウル、芸術とは魂の嘆き、芸術とは命を燃やす

ファイヤーソウル。まさか、まさか、こんな所で会う事になることは。

ワシは目から心の汗が出るのを止める事が出来なかった。理解されなかった世界、金と欲に塗れた世界、だが、だが、だがっ！

世界はまだまだ捨てたものではない、ここに、ここに芸術の真髄を知る男が居たのだから。

「魂が叫ぶかい？ 魂が訴えるのかい？ それは間違いじゃねえ、魂に従った行動は間違いなんかじゃねえんだぜ」

ああ、そうだ、そうとも、そうともさ！ ワシはまだいける、まだやれる、そう、そうだワシにしか出来ない芸術作品を作ってみせる。

ありがとう月光 グレイツ 輝。君の事は忘れない。もしなにか困ったことがあれば手を貸そう。ワシの名前は相良 権蔵、覚えておいてくれ。

「フ、なにいつてんだい権蔵。アンタの名前は違うだろ？ 相良アーティスティック 権蔵 イン グレイツ。それが今からアンタの名前さ」

フ、言うじゃないかグレイツ 輝。その名前頂こう、見ているグレイツ 輝。ワシの芸術はまだまだ伸びる、まだまだ世界を変えて行く。

そしてワシはその場を後にした、もはやワシ等に会話は要らない。ワシの芸術で語る、そうワシは芸術で語ってみせる、このソウルボイスをつ！

「あーちゃん、あーちゃん、さっきのおじーちゃん誰ー？」

「愚問だな由美、漢と漢が出会った瞬間。それはもはやソウルブラザー。それ以上の言葉はいらねえはずだぜ？」

「誰か、誰か突っ込んで、もう先生無理よ、先生のライフはゼロよ……」

おにいちゃんはずっいの

題名おにいちゃん。

わたしのおにいちゃんは、すっごいおにいちゃんです。えい語も、ふらんす語も、どいつ語もしゃべれるんです。わたしは、えいごをちよつと、おしえてもらってます。でも、おにいちゃんみたいにしやべれません。

おにいちゃんは、なんでもできます。おにいちゃんにはできないことはないって、いつてました。あかねのためなら、なんでもできるっていつてました。

だからわたしも、おにいちゃんのためならなんでもできるっていつたら、ちが、いつぱい、おはなからでて、とつてもたいへんでした。

おにいちゃんが、しんじやうとおもって、いつしょうけんめい、がんばりました。

おにいちゃんは、おともだちも、いつぱいいます。きのうは、しーあいえーのちよーかんさん、というひとからでんわがありました。あんまりしゃべれないわたしのために、ゆっくりしゃべってくれ、とつてもやさしいおじさんでした。

あと、ごるばすおじさんも、よくいつしよにあそんでくれます。えすぴーさん、つてきいたけど、むずかしくてわかりませんでした。

さいきんは、ごとーさんとなかよくなつたって、いつてました。ごとーさんはせなかに、えがかいてあるおじさんです。おにーちゃんのことをあにきつてよびます。おにーちゃんは、わたしのおにーちゃんだから、とらないでほしいです。

でもわたしは、そんなおにいちゃんが、だいすきです。おわり。

「はい、皆、今の発表は聞かなかったことにしましょうね。おもにご両親のために」

せんせいせんせい。

「なにかな茜ちゃん」

おにいちゃんからおてがみ、もらったの！　せんせいによんであげてっ！

「へ、へえ……？」

んと、んと、んしょ……。

ふえ、よめない、よめないの、せんせいごめんなさい、よめないの、ふえ、ふえええ。

「大丈夫よー、先生に貸してごらんなさい、どれどれ」

『茜になんかあったら教育委員会に圧力かけて幼稚園そのものを更地にしてやるから覚えとけよ』

「よおおおし！　茜ちゃん泣きやもうか、大丈夫！　先生読めたから！　ぜんぜん読めたから大丈夫、それとてめえら！　茜ちゃん泣かしたら私がぶちのめす！　まず、私が、ぶちのめす！　むしろそれが救いだと思えこの野郎！」

せんせい、せんせがこわい、こわいよお。おにいちゃん、ふえ、ふえええ。

「まってえええ、泣かないで！　私の将来的に泣かないで！」

輝年長組みシーズンはじまるよっ！

ジャステイスそれは勇気の言葉

よう、輝だ今日もよろしく。年長組になった俺は、いつものメンバーとサッカーをするつつうんで仕方がねえから河川敷に向かっている。

妹との一時を邪魔した奴らに地獄よりも辛い生き地獄を味あわせてやろうと検討中ではあるが、さすがに大人げないので勘弁してやることに結論ずけた、ほんの3秒前にだが。

そんな俺の前に一人の少女が立っている、服が汚れていて、暗めの雰囲気纏った少女だ、ぼう、とこちらを見ているのが気になって声をかけてみたらビクリと体を震わせて脅えられた。

おいおいハニー勘弁してくれよ、俺はそんなに悪人面か？ 見ろよ俺の顔を、妖精さんもびっくりな世間一般的に言えば普通過ぎる顔だぜこの野郎。

顔に文句はねえよ、でもな？ 目と鼻と口があるんだからおびえちゃいけねえぜお嬢ちゃん。

おう、こいつぁ失礼俺の名前は月光 グレイツ 輝。グレイツは大事だからな付け忘れちゃいけねえ。

「え、え」

おつと難しすぎたか悪かったな。俺も日々年長組としての精神鍛錬を行っているんだがまだまだつてえ訳だ、許してくれ。俺もお前もここであつたが何かの縁、地球規模のビックインパクトってわけさ、わかるかハニー？

そんなわけで名前を覚えてくれないかいマドモアゼル、もといマンドラゴラ。

「マンド？ えと、うんと、かな……、さおとめ、かな」

おうよ！　これで俺とお前はソウルブラザー、今から河川敷でサッカーをやるんだけど一緒にくるかい？　むしろ河川敷の野郎どもを潰して茜に会いに戻るのを手伝ってくれるかい？

「ぶらざー……？」

なんてこつたい、こいつはなんてこつたい、俺としたことがこの燃え上がるハーツを伝え損なうとは。絶望した、己の力不足に絶望したっ！

ブラザーフレンドマイハニー、ダチってことよお嬢ちゃん！　友達、戦友、イエスシスターノータッチ！

「ともだち？　かなと友達なの？」

おうよ、でもちいと違う、友達じゃねえ、ソウルブラザーよ、ソウル、燃え上がるソウル、それこそが俺たちのジャスティス。俺たちの行動原理さ！

さあ、いこうぜあの地平線の彼方へ、見るよ、あの青い大空を、鳥のように自由に飛ばうぜ、世界を股に掛けて俺たちは船をこぐ、まだ見ぬ世界の神秘をその手に掴むために！

「う、うん。でもかなおうちに帰らないとおとうさんに怒られちゃうから」

なんだって？　遊んで怒られるってえどついう了見だい、そいつあおかしい、おかしすぎねえかい？

「ごめんなさい、でもおとうさんおこるから、わたしかえるね。友達になつてくれてありがとう」

おいおいおい、ちよつとまでよおい、そりゃあねえぜ、そのお父さんとやらと話をさせてくれよ、心配いらねえ、うまく話を付けてやるからよ。鬼の副長ここに有りつてな。

そう伝えてその子の手を掴む、びつくりするほど細いその腕、少しだけ見えたその肌に小さな青痣が見えた。

おい、そいつぁなんだ？

「ひつ……、なんでもない、なんでもないの、かなが悪いの、かながいい子じゃないから」

へいへいへいへい、どういう事だいそいつぁ、ちよいときな。心配いらねえ、俺に全部任せときな。

「え、だめ、かえらないと」

正臣いいいい、ちいとこいやぁあ！

「おおつ、どうした輝、そんな大声出して、って誰だその子」

おお、悪いな。ちいと組の連中呼んでくれや、集合場所は幼稚園のホールだ。男、いや漢だけで良い、わかるな。

「そいつぁレッドかい？」

おおつよ、レッドもレッド、頼んだぜ兄弟。

「任せときな、30分もあればすぐに集めてやるぜ」

かなちゃんよ、心配いらねえ、大丈夫。何かあつたら俺が守る、お前を守ってやる、だから心配するな。俺の傍にいな。

「でも、でも、だって、輝君が、輝君が」

かなよう、甘えられる時に甘えるのが悪い事じゃねえんだぜ？

俺の目を見な、この燃え上がる情熱の炎、グレイツの名は伊達じゃない事を見せてやるぜ。

「やっぱりだめ、だめだよ！ ごめんね、ありがとう！」

おい、ちよつとっ！

ダツと駆け出す香奈、あわてて捕まえようとするが横から飛び出てきた自転車に強制的に分断される。

そうして気が付いたときには少女はいなくなっていた。

何と言うことだ、俺としたことが、俺としたことがあああっ！

悔しさに耐え切れず地面に拳を振り下ろす、ズガツ、という音と共にコンクリートの道路に突き刺さる拳を悔しげな目で見つめる。

悔やんでいる場合ではない、すぐに俺は懐に入っていた携帯を取り出す。特殊技巧高速連打により、コンマ2秒で画面に浮き出てきたソウルブラザーに電話をかける。

「ゴルバス、仕事だ。早乙女 香奈、この子の住所を調べてくれ」

『了解ボス 3分で調べあげて見せませう』

頼もしいソウルブラザーの声を聞き、電話を切る。後は、ダチの意志だけだ。

30分後、そこは幼稚園の多目的ホール。そのフロアには幼稚園のダチ、いやブラザーが集まっていた。

ようみんな、忙しいところ悪いな。今回集まって貰ったのは他にもねえ。

今日俺のダチになった子供、その子供が虐待を受けている可能性がある。

俺のツテを使ったところ、どうやらかなり可能性は高い。俺はゆるせねえ、俺は絶対にゆるせねえと思っっている。

だからこれから救出に行く、てめえら、ついてくるかい？

当然先鋒は俺がやる、だが、だがな、お前等にはもしもの為に俺を助けてほしい。

「た、たすけてって、でもそれ本当かどうか分からないんでしょ？」

「そんな事したらお母さんに怒られるかもしれないよ」

「もし間違いだったらどうするの、お父さんとお母さんにまた怒られちゃうよ・・・」

ざわざわと騒ぎだす児童達、だが、だがしかし。

バン、と机を叩きつける。その音はホール隅々までに響きわたり、騒いでいた子供たちは水を打ったように一気に静まり大人しくなる。叩いた本人の顔は俯いており、よく見えない、良く見ると肩が震えている。

己の力不足を嘆いているのか、いや、違う、ブラザーの情けなさを感じているのだ。

ゆっくりとあがる顔、その顔、いや瞳には燃え盛るソウルファイヤーが輝いていた。

紡がれる言葉、語り継がれる伝説のセリフ、心に残るブラザーソウル。それが今ここに顕現する。

おめえらよう、少女が一人泣いている。心の中で泣いている。他に理由はいんのかい？

その声が、消して大きくはない、その声が、ホールに集まる児童達全員の耳に届いた。鼓膜を叩き脳にゆっくりと染み込んだ後、己の弱さに皆絶望の色を目に宿す。

俺たちは自分の保身しか考えていなかった、漢になったと思っていたのに、結局俺たちはなにも変わっていなかった。ある者は嘆き、ある者は苦悩する、己の弱さに直面し、突きつけられたがために。

もしかしたら、けれども、だから、だって、でも。そう、そんな言葉は漢にはないのだ！

潮が引くように、潮が満ちるように決意の光が、決意のファイヤーが燃え盛る。

「副長、どうやらもう言葉はいらねえみたいだぜ」

正臣、すまねえな、熱くなっちゃまった。みんな守りたい物があることは分かっていたんだがな。

「なに弱気になってるんだい副長、あんただから俺たちは付いていくと決めたんだ。そうだろうブラザー」

ふ、じゃあいこうか、半ズボン組は膝のけがに注意しな、気合い入れるぜ野郎ども、帽子をかぶれ！

合図と共に藍色の帽子を各々かぶり出す。学者風の帽子をアレンジし、幼稚園児にもかぶれるように小型化したその帽子には、風で飛ばないように細いゴム紐が付いており、一定の安心感が得られるシロモノだ。

そのゴム紐を首にかけた後、一気に下へ引く。そして離す！バチンという音がホールに広がり、気合いが注入される。

いくぜお前等、こっから先は戦場だ！

大事なもの？ 愚問だなブラザー

気が付いたら暴力を振るってしまっている。そんな生活になったのはいつからだろう。

自分の娘なのに、その仕草が、態度が、存在が疎ましい。

知らない男と出ていった元妻に似てくるその顔が気に入らないのか、仕事で上手くいかないそのストレスをぶつけているのか、もはや原因すらわからなくなってしまうていた。

久しぶりの休日、部屋で酒を飲んでいると、どこかうれしそうな顔をして香奈が帰ってきた。だが、俺の姿を見ると途端に顔をこわばらせ無表情になる。

それはそうだろう、普段から暴力を振るっている俺を見てそういう態度になるのもわかる、だがそれすら俺は気に入らない。わかっている。わかっているけどどうしても、どうしても我慢できないのだ。

思わず怒鳴り声をかけてしまっ、びくりと震えるその体を捕まえ、手を振りあげる、その時チャイムがなった。

こんな時間にいったい誰がと思う、玄関に向かって声を荒げ、用件を聞くが帰ってくるのは再度のチャイム。

仕方がないので玄関に向かい、ドアを開ける、そこには4、5歳くらいだろうか、幼稚園服を着込んだ子供が一人立っていた。

「祇園精舎の鐘の声」

急にしゃべり出すその子供、どいつもこいつも、と思い怒鳴りつけようとその顔を見るとその目は、その子供の目は、まるで夜叉の

ごとく深淵に潜む炎を、たぎる炎をこれでもかと溢れさせている。

恐ろしかった、たかが幼稚園児にこの俺が恐れたのだ、あわてて扉を閉める。ボタンという音と共に扉が閉まるが扉の反対側で声はまだ聞こえる。

「諸行無常の響きあり」

ずりずりと後ずさる、腰は抜けて立つことが出来ない、なんだ、この恐怖は何だというのだ。

「沙羅双樹の花の色」

ばかな、たかが幼稚園児に、幼稚園児ごときに。

「盛者必衰の理をあらわす」

ザン、と鉄製の扉が切りさかれる。

まさか、まさか木刀で、木刀で切ったというのかその扉を！

「てめえの罪を数えな、貴様の乳首は何色だああああ！」

振りおろされる木刀、打ちのめされる俺。乳首、そうか、乳首の色。

昔俺は乳首の色は桜色だと思っていた、だが、現実はそんなに甘くはなかった。桜色の乳首なんてどこにもなかった。だから俺は絶望した、この世界に絶望してしまった。

だが、だがどうだ、それを探していた俺の乳首はどうだった、桜色だったか、桜色でもない俺が、桜色を探していたというのか、愚かだ、俺は愚かだ、そんな原点にも気づかないほど追いつめられていたなんて。

力の入らない体を必死に持ち上げその幼稚園児を見る、剣を構えこちらを見下ろしている。とどめを刺さないのだろうか、そう思っ
てみると構えが変わる。

な、なんと、まさかこの構えバルタ 星人だとつ………！

俺はこのとき初めて前に立っている幼稚園児、いや男、いや、漢
を理解した。

これは、この漢は逆らっちゃいけない、闘つてはいけない、そう、
けて勝てないアヴァロン。

その構えのままその漢はしゃべりだす。

「お前には足りない物がある、それはあああつ！ 情熱思想理念頭
脳気品優雅さ勤勉さ、そしてなによりもおおおおおおおおおお
！」

振りかぶられる木刀、そして吹き飛ばされる俺、体の痛みより心
の痛みが辛い、俺は、俺はなにを見ていたんだ。

崩れ落ちていく俺の耳に聞こえる最後のセリフ、俺の心に響く最
後のセリフ、そうだ、そうだったのか、それこそが真実だったのか。

「妹が足りないっ！」

チン、と鞘が無くとも納刀の音が部屋に響く、そうか、俺は、俺
はあああああつ。

涙が止めどなく溢れていく、謝ろう、娘に。いや、妹に。

「ふっ、どうやら戻ってきたようだ。目の色が変わってるぜ」
ああ、すまない、本当にすまない、俺は、俺は……。

「俺より先に謝る相手がいるんじゃないかねえのかい？」
そうだな、償えるかはわからない、でもこれから一生かけて償うよ。

「償う？　ちげえな、尽くすのさ、無償の愛こそが本当の真実、
トウルースさ」

そうか、そうだな、無償の愛、忘れていたよ。

そうだ、きみの、いや、あなた様の名前を覚えていただけないだろうか。

「様なんて不要だぜ、俺たちはもう魂の友、ソウルブラザーじゃねえか」

そんな、こんな俺をブラザーと呼んでくれるのか友よっ！

「過去は重要なファクターの一つ、だがそれだけが全てじゃねえ、
あんたがこれから何をするか、それこそが本当に大事な事さ」
目の前が見えない、俺は、俺は止めどなく流れる涙で前が見えなくなっていた。

俺は、俺は、俺はっ………！

「俺の名前は月光　グレイツ　輝。いや、ジャスティス　輝、そう呼んでくれ」

ジャスティス、心に響く、魂に響く、体が、心が、魂が洗われていく、香奈、すまない、俺は、俺は……。

「もう大丈夫なようだ……。勝ち鬨をあげる野郎ども！ 俺たちの勝利だ！」

木刀を掲げ、叫ぶジャステイス、どこからともなく声が聞こえてくる。アパートの外を見ると幼稚園児が集まり声を張り上げ、叫んでいる。

「ジャステイス！ ジャステイス！ ジャステイス！」
気づいたら俺も一緒に叫んでいた、そうだ俺のジャステイス、俺の愛、俺の思い、いつこの罪が消えるかはわからない。だが、だが、俺は一生かけて尽くそう、それが、それこそが俺のジャステイスだから。

「あれ、知らない子が……」

「俺たちのブラザーさ」

「いや、輝君。勝手に園児を増やしちゃ……。いや、ごめんなさい何でもありません。はあ……。えーとお名前はなんていうのかな？」

「さおとめ ジャステイス かな！ 5さい！」

「え、ええと……。ご両親は？」

「んと、んと、おかーさんはいないの、でもおとーさんはおにーちゃんになったの！」

「えーと、うん。輝君どういうこと？」

「フツ、つまりはジャステイスさっ！」

「わかるかほけえええ！」

やる以上はブラザーだろうよ！

空は満点の青空、透き通るほど美しい青に申し訳程度に白い雲が流れている。

気温は30度オーバー、じわじわと肌に突き刺さる熱線、そして熱気がグラウンドを揺らめかせ、屋気楼のようにぼんやりとした景色を見せている。

スポーツ、それは世界共通のゲーム。行っているのは野球。

野球とはボールとバットを使って行うゲーム、スポーツ、球技の一つである。

発祥地はアメリカ合衆国、今現在は日本はもちろん、韓国、台湾そしてキューバなどで盛んに行われている。

二つのチームが交互に攻撃と守備を入れ替えて勝敗を競う戦争であり、そこに情熱と、熱情と、気合と、根性と、熱血と。

そしてマネージャー（美人）が混在するカオスな空間である。

だれもが甲子園を目指し、そして誰もが南ちゃんを夢見る世界。双子のファンタジー、双子のビクトリー。

それが野球である。

白い白球を追い求め、暑いグラウンドの上で汗をかく。それこそが青春、それこそが漢、それこそがファイヤーソウルである。

そんな野球を河川敷のグラウンドで行っているわけだが、グラウンドにいるのは小学生、いわゆるリトルリーグである。

9回裏、カウントは1-0、ツアウトで最後の打者。
ぶん、とバットを振るいバッターボックスに立つのは歴戦の戦士
ゴルバス。

小学生を押しやり代打としてそこに立つ。

対面するは一人のピッチャー、最強、無敵、唯我独尊。月光 ジ
ヤステイス 輝。世界最強の5歳児である。

「大佐^{カーネル}、手加減はしませんよ」

フ、当然だ。漢と漢の勝負、そこに手加減も、油断も、妥協も、
そしてこの後の事を考えることなど無い！

そう、彼はここまで全ての小学生を3者3振で討ち取っていた。
その球速は150km、とてもではないが幼稚園児に出せる速度で
はない。

だがきつと彼ならこう言うだろう。漢だから、それ以外に理由が
あんのかい？ と。

そうだ、漢。漢は全てを理解する、すべてを網羅する、全てを現
実へと現すビクトリーパワー。

ギリリ、と構えている姿が見える。立ち上がる妖炎が見える。あ
れは漢炎、まさに漢の勝負。

ゴクリと唾を飲む音がベンチから聞こえてくるような錯覚に陥る。

シン、と静まるグラウンド。

ゴルバスの体がゆっくりと^{バッティングフォーム}戦闘体制に変わっていく。

オープンスタンスに構えた彼の懐にはRugerMark?が姿を覗かせている。

なかなかクラシカルな趣味じゃねえか軍曹、だが、俺は立ちどまらねえ、俺の弾、俺のソウルファイヤーを受けてみな！

振りかぶる腕、そして放たれる弾、ソウルファイヤー時速150kmを超えるその弾は空気を切り裂き、ゴルバスへと迫る。

ストライクッ！

バットを振りもしないでボールだけを見つめている歴戦の戦士、歴戦の漢、英雄漢、ゴルバス。

誰もが諦めの顔をする。やはり駄目だったか、彼でも駄目だったのか。

ツーストライク！

絶望に染まるベンチ、いや、予想していた事だ、有る程度予想していた事ではあったのだ。

あの弾は誰にも打てない、そう、あの男、ジャステイス 輝のソウルファイヤーに迫れるほどのビクトリーパワーを持つ者はいない。そう、そう思っていた。

しかし、しかしだ、彼は伊達ではなかった、歴戦の戦士、英雄の名は伊達ではなかった。

「SIG SG550の弾速より遅いつ！」

2球、そう2球で彼はそれを見極めていた。

弾速、当たり前だと誰もが言うだろうが、しかし本人は大真面目。そう、彼にとつては弾より早いか、遅いか、それが全て。

世界にスイカ派とメロン派がいるように、きのこの山派とたけのこの里派がいるように、巨乳派と微乳派がいるように、彼は遅いか、早いかで判断したのだ。

振りぬかれるバット、ちなみにバットは木製バット。ぎゅっと握られたグリップ、音速？ で振りぬかれるヘッド。

まさに魂を籠めた白い弾をそいつは、そのバットは、その懐で、ボディーで、そのウッドボディー、ウッドソウルで受け止めた。

きつとバットとボールは語ったはずだ。

熱い、熱いぜボール！ だが、だが俺のソウルはどうだい！ 俺のソウルを感じれるかい！ 君がぐにやりと俺のボディーに熱烈なハグをかましてくれていているこの瞬間！ この瞬間にこそ俺のソウルを感じたかい！

ああ、感じたぜバット！ 俺の熱烈なハグを受け止めてくれたためえの熱いソウルファイヤー、芯まで、俺の芯まで響いたぜ！ と。

キン、と言う音と同時に、空高く舞い上がるボール。バットが、ボオオオオルウウウウウお前の事はわすれねええええ！ と叫んでいるのは置いておいて、まさにホームランコース、一気に歓声が沸きあがる。これで、同点、そう同点なのだ。

しかし、ジャステイス 輝は伊達じゃねえ。舞い上がるボールをニヤリと見たかと思ったら神速の抜き打ちで背からAMTハードボラーを取り出し、宙を舞うボールに狙いを定める。

A M T ハードボーラー、そうあのアーノルド・ユワルツエネガー、ターネーターでも使われていた恐るべき銃だ。

当然世間的な事情で本物ではない。漢だから、で本物を仕入れれることも出来たが妹の情操教育に重点をおき、改造ガスガンで我慢したのだ。

そいつを抜き出し、弾に向けて射撃。乾いた音がグラウンドに響く。

ゴルバスによって鍛えられたその腕前は伊達じゃない、それに加えてソウルファイヤーたる漢のジャスティスが煌いている。

外れるはずが無い、そう、外れるはずが無いのだ。

連続で空中を飛ぶ弾を直撃する鉛製のBB弾、一気に速度を落とし、そして彼の元へと落ちてくる。

ポン、と収まるグローブキャッチ。ここに勝負は決まった、そう、決まったのだ。

そのグローブに収まった白いハニーを見つめながら呟くジャスティス。

軍曹、今回は俺に花を持たせてくれたようだな

「大佐^{カーネル}、漢の勝負です、その様な言葉は無粋でしょう」

そう、軍曹は懐のR u g e r M a r k ? を抜かなかった、それは彼なりの信条、彼の漢としてのソウルジャスティス。

ゲエエムセエエエツト！ もうやってられるかほけええ！

どごその審判と監督が帽子をグラウンドに叩き付けたのはきつと

気のせいだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4774t/>

人生なんてそんなもの

2011年6月5日21時37分発行